

傑出した卒業生たち (続き)

【奥 保肇】元帥 (1847~1930)

育徳館の前身「思永館」で剣道を柳瀬平四郎、槍術を高田又兵衛、学問を三宅円司に習った。明治3年上京して陸軍養成所に入り、兵学を学んだ。西南の役では谷干城の部下として熊本鎮台(城内)にいたが、西郷軍に囲まれて絶対絶命状態の中、歩兵一個大隊をもって決死隊を組織し、自ら陣頭に立ち、1万5千の西郷軍の包囲を突破、政府軍との連絡に成功して窮地を脱した。明治27年の日清戦争では、第5師団長として従軍、武勲を立て、明治36年陸軍大将に昇進。日露戦争では第2軍司令官として大軍を率いた。当時薩長以外の人物が司令官となるのは異例のことであった。軍司令官の中で参謀なしで指揮が執れるのは奥だけと言われ、絶大の信頼を得ていた。日露戦争後、明治40年伯爵に叙せられ、明治44年には遂に元帥府に列せられた。昭和5年7月19日東京牛込の自邸で83歳の生涯を閉じた。

【松室 致】司法大臣 (1852~1931)

嘉永5年(1852)小倉藩士松室シン吾の長男として小倉で生まれ、育徳館で学んだ。上京して司法省法律学校に入学、明治17年卒業。司法省に入省し、明治39年大審院検事総長に栄進。大正元年(1912)の第三次桂内閣で司法大臣に就任。司法界の改革を行った。大正5年寺内内閣で再び司法大臣となった。退官後、法政大学の初代学長などで活躍した。

【岩垂邦彦】NECの生みの親 (1857~1941)

安政4年小倉藩士喜多村脩蔵の次男として生まれ、育徳館で学んだ後、工部大学校(現東大工学部)に入学して電信技術を学んだ。渡米して、エジソン・ゼネラル(後のゼネラルエレクトリック社)に日本人として初めて勤務が許され、熱心に仕事に取り組んだ。その勤勉と能力は幹部の知るところとなり、発明王エジソンのもとで電気技術を学んだ。帰国後、直流方式が全盛時代に交流方式の優位性に着目、普及採用に尽力した。ウェスタン社が日本進出に当って、岩垂に協力を求め、日本電気合資会社(現NEC)が設立された。日本最初の外資会社であった。

岩垂によって堅実に経営され大企業へと成長した。昭和4年(1929)会社を去るときに電気学会と豊前奨学会に多額の寄付をし「岩垂資金」枠が設けられた。また、大学院生を対象に財団法人岩垂奨学会を設立し、奨学金を贈ることを目的にして現在も運営されている。

【堺利彦】社会主義運動の父 (1870~1933)

明治3年小笠原藩士の三男として犀川で生まれた。本学を明治19年首席で卒業し、第一高等学校に入学、一高の先輩尾崎紅葉に陶酔、福岡日日新聞社、万朝報

野正豊稔(東京錦陵会名誉会長 豊津中昭和19年卒)
(社)国際社会人剣道クラブ会長 剣道範士八段
(校章の変遷と学帽)



の記者として活躍、幸徳秋水、内村鑑三らと「理想団」を結成し、社会主義運動をリードする中心人物となった。大正13年日本共産党が創立され、総務幹事長(書記長)となった。

昭和35年利彦生誕90周年を記念して「堺利彦顕彰記念碑」が建立され、除幕式には荒畑寒村、鈴木茂三郎、向坂逸郎など多数の学者、文化人、報道関係者などが参列し、豊津空前の賑わいを見せた。

記念碑には赤幡事件服役中に詠んだ望郷の詞「母と共に、花しほらしの、薬草の、千振りつみし、故郷の野よ」が刻まれている。

二人の同級生大臣【杉山元】と【勝正憲】

明治31年の卒業生同クラス28人の内の二人である。他に恒遠新、堀田正一がいる。

卒業成績はトップが堀田、杉山3番、勝4番だった。

杉山元は陸軍士官学校から陸軍大学に進み、陸軍教育総監、参謀総長、陸軍大臣の陸軍3長官を歴任し、元帥府に列せられた。昭和20年8月10日今次大戦の終戦に際し、「御詫言上書」を書き上げ、総軍復員の任務が完了した翌日(9月12日)に市谷総軍司令官室で自決した。同日ご夫人「サイ」さんも杉山の死を確認した後、自宅で短刀のいよって自害した。

ラジオ放送は昭和の乃木將軍夫妻と讃えた。

勝正憲は東大進学し、医学を修めたが、東京市第一助役を勤めた後、政界に転じ衆議院議員となり、党幹事長を勤め昭和15年米内内閣で通信大臣となった。その時杉山元も陸軍大臣に再任され、二人の同級生が同じ内閣の閣僚として活躍した。

四人のクラスメイト【劔木亨弘】【奥村喜和男】

【高原逸人】【山中正夫】

大正8年の卒業のクラスメイトである。劔木は五高時代に池田勇人、佐藤栄作と同クラスで文部次官から参議院議員となり、第二次池田内閣で文部大臣を務めた。奥村喜和男は太平洋戦争開戦時に情報局次長として「国民に訴う」と題して熱血放送をした。高原逸人は台湾高雄州知事、南方方面司政長官の要職を務めた。山中正夫は三菱に入り、三菱鉱業、セメントの社長、会長を勤めた。

育徳館は255年の歳月を刻んで以上の他にも幾多の有為な人材を輩出してきたのである。